（ヨーロッパの旅）

美しい五月ともなれば

平井信義

（一）

ドイツの冬は、酷しく長く、四月半ばを過ぎてもなお、スチームに足を暖めなければならない日がありました。例年よりことさらに寒さが酷しく、零下三〇度近くまで温度計が下り、ライン河がすっかり凍結するほどの年でしたので、春の訪れもずっと遅れたようです。

静かに闇の色を増していく夕空を、窓辺に倚って眺めていますと、隣の室のテラスに、かすかに動く人影。それはオイラーおばさんでした。

「静かですね」私が声をかけますと、

「先生も、静寂をお好きですか」と低い声できき返してきました。

「ええ、好きです」

「私も、こうして、いつまでもじっとしているのが一番好きです。一人でいるのが好きなのです……。菩提樹の若芽がかすかにゆれていますね。見えますか？」

「ええ、見えます」

「今年は、この若芽がほころぶのが、四週間も遅いのです。しかし、もう間もなく、どんどんと葉を茂らせるでしょう。今日は、その動きを感ずることができますね」

二人はしばらく黙っていました。刻一刻暮れていく闇の中に、オイラーおばさんの顔の輪廓がようやく見えるほどでありました。二人は、さらに黙っていました。そしてそれぞれの目差しを、遠い空に向けていました。

ドイツ人といっしょにいて、こうした静かなときを持ったのは、

これがはじめてでした。二人いれば、必ず何か喋らなければならない、黙っていることが何か重苦しい感じを受ける人たちばかりでした。しかし、その日は、二人でいることを意識しながら、心ゆくばかり、五月のドイツの空を楽しむことができたのでした。

それにつけても、三月にマールブルクを訪問した際、ロイナー博士と話し合ったときのことを思い出します。近頃の私どもの生活の中で、いったい、子どもに静かなときを持たせることがあるだろうか、というのが彼の私に対する問いでもありました。

「二〇年あるいは三〇年前の子どもとくらべて、今の子どもに与えられることの少ないのが、この静かなときというものではないでしょうか。確かに、教育技術は進んだかも知れません。子どもを理解するための心理学も発達したといえましょう。いわゆる文明の名のつく材料が、子どもの周囲にたくさん積まれていることも、あるいはよいかも知れません。しかし、そうした技術・学問・材料といったものが、子どもにつぎつぎと与えられる——それが教育だということになってはいないでしょうか。そのために、子どもたちは、自分から考える力を失おうとしているのではないでしょうか。自分からものを見つめる力を失ってはいないでしょうか。こうした二つの力は、子どもへの教育から開放して、子どもにぼんやりしたときを与えることによって、子どもが自分の中に獲得していくものではないでしょうか」

「私も、それをしみじみ感じていたところです。先日、私は、チューリッヒ湖畔に立って、白鳥が湖面に立てる水の動きを見ていました。湖面の静かな動きに心が沈潜すればするほど、背後に流れる都会の騒音が押し寄せてきたのを思い出します」

「たしかに。自動車・電車・イルミネーション。人間の文明は進んだように見えても、人間の心から奪い去られていくものがあるのではないでしょうか」

「私ども日本人は、静かなときを持つのが好きな国民でした……」

「おお、それをきかせて下さい。私も、日本人が、そういう国民だということをきいていました。私には、それが、実際の日本人の生活の中で、どのように現われているのかを、前から知りたく思っていたのです。どうか話して下さい」

「ロイナーさん。残念ながら、現在の日本人の生活の中で、どのように静かなときを持っているか、はっきりお話できないのです。すでに、都会も田舎も、生活の気分というものは西欧化しているのです。私は都会、東京に住んでいますが、自動車は警笛を鳴らしています。ラジオは多くのときをジャズに費しています。テレビの刺激を求めている者も多いのです。その中で生活している子どもたちは、もう、それが当然だと思っているようです」

「日本人は、日本人のよさをどこに求めているのでしょうか。たくさんの美しい自然があるときいています。それを味わう心の余裕は、戦争で奪われてしまったのでしょうか」

「戦争というより、あなたのおっしゃる近代文明といった方がよいでしょう。戦後、アメリカからそうした文明が一度にどっとはいってきたのです。そして、それに魅了されてしまったのです。自分たちが遅れていると感じてしまったのです」

「ドイツも同じだ」と彼は叫ぶようにいいました。「私どもは、アメ

リカの文明がはいってくることに抵抗しました。しかし、あの物質文明は魅力的なのですね。今のドイツ人の求めているものは、静かなときではなくて、自動車だのテレビなのです」

「……」

「子どもを見てごらんなさい。そうしたものの刺激を受ける準備にばかり心を使っています。ほんとうにものを考え、ものを見詰めることができるでしょうか。私には、それが、いまの青少年の問題でもあると思います。残念なことに思えてなりません」

二人の差し向っている応接室の丸い机には、入り日が射し込んできた。それが、猫柳の花を美しく紅に染め出したその色を、今もなお思い出すことができます。

(二)

長い冬籠りは、春を待つ気持に拍車をかけます。「美しい五月になれば」という気持は、日本人より、ドイツ人の方がはるかに強いことと思われます。実際、五月の半ばをすぎると、大学までのいくつかの並木道では、木々枝々が、日一日と葉の緑を染め、黄・赤・紅・白の花々を咲かせました。名も知らぬそれらの花は、私の往来には「旅情」を慰めてくれるものでありました。

そのようなとき、ケルンのゲルツニッヒ公会堂で「ペスタロッチ・フレーベル集会」が催されました。ドイツにおける数少ない保育者の集りの一つであります。ドイツ全地方から、保母さんや、青年指導員、ケースワーカーが集ってきました。これらの人々は同じ系統の教育をうけて資格を取った女性です。もちろん、幼稚園教諭と保育所保母の区別はありません。いずれも、キンダーゲルトネリンなのであります。そして、保母の資格を得た上に、さらに所定の教育を受けると、青年指導員やケースワーカーの資格を得ることができるのです。

それらの人々が、約千五百人位は集ったでしょうか。パイプオルガンの独奏につづいて、小学生の歌劇が催されました。四日間の集会の幕は切っておとされました。会長ベッセル女史の挨拶。ドイツ人には珍らしくにこにこした顔つきのお年寄りでありました。ついで、市長その他、おえら方の演説が長々とつづき、方々であくびがでたりざわめくのは日本と同じことであります。会の進行や各種の案内などについて、意見の交換が行われて、その日の午前中は終えてしまいました。ドイツの午前中というのは一時までです。そして、五時までは休みます。その日は、六時からクロイツ教授の「子どもの問題」についての講演をききにいきました。異国人の中で、しかも黒一点は私でありましたので、みんなからいっせいに見られたのには、いささか閉口しました。

クロイツ教授は「青年期の急激な発育」「青春期の早発化」から論旨を展開し始めました。この問題は、ヨーロッパの大きな論争点なのです。すなわち、子どもたちの成長が非常によくなったけれども、青年期が早く来るようになってしまったのです。この百年間に、初経の平均年齢などは十七、八歳から十一、二歳になってしまいました。この調子であと百年たっと、幼児期に初経が始まるかも知れません。ここに、青少年問題の大きな原因があると見なされて

いるのです。したがって、子どもたちが年々大きくなることを、素直に喜ぶことのできなくなったことは、非常におもしろいことだと思います。これについてはまた、あとでお話ししましょう。クロイツ教授は、その他、戦後の不安から来ている子どもの不安定、その現われとして子どものノイローゼの増加と学力低下を指摘され、性教育問題に及びました。

次の日の午前中は、社会学のベラ教授の講演がありました。ベラ教授は、徹頭徹尾「母親の職業」について批判的であることを述べられました。ドイツでは今、求人難です。そのために、多数の母親が職業戦線に狩り出されています。ある人は母親の三割といいます。ベラ教授は、そうした職業婦人が、子どもを放任していることを警戒し、近代の物質文明、器械文明が、母親を子どもから引き去らってしまったこと、それらを通じて、子どもの問題が増加しており、青少年問題となっていることを繰り返し強調されたのです。ことに婦人の職業化は、家庭経済をゆたかにし、しかもそれは物質文明への魅力をかりたてるというのです。講演のあと、ベラ教授の意見は、あまりにも悲観的であるという批評を耳にしましたが、私には非常に感ずるところがありました。

小児科教授のニチュケ氏は「郷愁反応」という言葉を使って、ホスピタリスムスの話をされましたが、非常に哲学的で、聴衆にも理解できない点があり、しばしば場内が、ざわつきました。しかし、いねむりをしている者は、殆んど見当りませんでした。私にも、意味の理解できない点がたくさんありました。

このようにして、第三日目が終ると、つぎの日は、おのおの二、三台のバスを連ねて、六つの方向へと出発しました。私はオランダの幼稚園を見にいくグループにはいって、遊覧バスの一人になりました。

オランダの幼稚園は、ヴァールスといってドイツとの国境に近い町にありました。その幼稚園は、いわば日本の幼稚園と等しく、大体二時頃でおかえりになるのです。「ドイツとは異って、幸い私どもでは、おかあさんが働きにでている家庭が少ないのです。「幼い子どもは、おかあさんといっしょにいるときを多く持つことが、非常に大切なのです」と、ドイツの市立幼稚園が殆んど日本の保育所と同じように、母親の職業を助けるためのものであることについて、批判的な意見を、そこの園長は私にきかせてくれました。

子どもたちは、粘土をしたり積木をしていました。かなりけわしい階段を上って、三階まで保育室がありました。ここでも、フレーベルの恩物が使われていましたのは、ドイツの幼稚園と同様です。建物の窓という窓には、色とりどりのステンドグラスが嵌められ、特に便所の窓ガラスが美しかったのを、今でも思い出します。

その幼稚園を出てから、私は友人と、オランダ、ベルギーの旅に出かけました。

＊　＊　＊

（筆者はお茶の水女子大学助教授）